

会議名	第26回動物臨床医学会年次大会(産業動物医学フォーラム)
開催日時	平成17年11月19日(土) 10:00~18:30
開催場所	大阪国際会議場「グランキューブ大阪」(大阪市)
主催者	動物臨床医学会・鳥取県動物臨床医学研所
参加人数(概数)	約150名(主として大学、国公立機関の研究者及び開業獣医師)
1. 会議の概要 (500~1,000字程度または議事内容の資料添付)	<p>1. 一般講演(産業動物医学フォーラム) 乳牛及び肉牛に関する10課題の研究発表が行われた。発表者(所属):発表課題は以下のとおりである。1)犬丸ら(福岡 NOSAI):食品の安全対策を担う臨床獣医師の果たす役割、2)鴫田ら(北里大):黒毛和種子牛に対する天然型ヒトインターフェロン製剤の経口投与による免疫機構への影響、3)小比類巻ら(開業):乳牛の体重変動率(WCR)を用いた牛群管理指導の1、4)磯ら(開業):バー・スーチャーによる第四胃左方変位の治療成績、5)山田ら(開業):血液中のイオン化Ca濃度と血漿カルシウム濃度および血液 pH の関係、6)深瀬ら(明治薬科大):畜鶏舎から採取したイエバエの殺虫薬抵抗性、7)佐野ら(NOSAI 胆振):牛の趾間フレグモーネに対するセフチオフル 1 または 2mg/kg3日間皮下投与の有効性、8)大久保ら(日清丸紅飼料):市場導入和牛素牛に対する損耗防止の取り組み、9)清水ら(中原牧場):乳牛のグルコン酸カルシウム皮下注射による血中カルシウム濃度の推移と注射組織に与える影響、10)石井ら(開業 b):双子診断における超音波の有効性。</p> <p>2. 教育講演 畳(NOSAI 道南)は「繁殖管理の新しい展望」と題して講演し、繁殖成績の向上には定期繁殖検診が不可欠であることを指摘し、その検診技術として超音波診断法の有用性を説いた。</p> <p>3. ランチョンセミナー 田中(ファイザー)は「牛呼吸器症候群(BRDC)におけるマンヘミア・ヘモリチカの重要性及びその対策」と題して発表した。BRDCはウイルス、マイコプラズマ、細菌等の混合感染によっておこるが、マンヘミア・ヘモリチカ感染が発症に重要な役割を演じているとし、その予防には本菌の不活化ワクチン接種が有効であるとした。</p> <p>4. パネルディスカッション 「潜在性疾患への対応」をテーマとして、菊池(道立畜試)は「臨床 - 牛体を取り巻く変化」、植松(NOSAI 山形)は「検査 - 血液検査から感知出来ること」、佐藤(NOSAI 宮城)は「乳牛における潜在性疾患の対策」と題しては発言し、参加者も含めテーマを巡って活発な討論が行われた。</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	<p>1. イエバエの殺虫剤抵抗性 畜鶏舎におけるハエ類の駆除に多種多様な殺虫剤が使用されている。深瀬ら(明治薬科大)は、畜鶏舎から採取したイエバエのピレスロイド系及び有機リン系殺虫剤に対する抵抗性についての調べた。殺虫剤抵抗性はプロビット法による LD₅₀ 及び LD₁₀₀ の測定値で比較したところ、野外のイエバエは感受性系統イエバエに比べて、明らかに高い抵抗性を獲得していた。このことから、殺虫の作用機序が異なる薬物、または剤型の異なる製剤を併用をすべきであり、新製剤の開発も重要な課題と思われる。</p>

様式 1 (続き)

	<p>2. 繁殖領域における超音波技術の応用</p> <p>超音波診断装置は獣医科領域で広く利用されているが、牛の繁殖検診への応用は低調である。豊(NOSAI 道南)は、近年、小型携帯式超音波診断装置が開発され、臨床繁殖の領域における利用が普及しつつあり、早期妊娠診断、卵巣・子宮疾患の診断、早期胎子死滅の確認、胎齢の推定、双子の確認、胎子の性別診断などに有用であることを紹介し、繁殖検診への応用を呼びかけた。</p> <p>乳牛・肉牛の飼養規模の拡大に伴い、診療業務は個体診療から牛群管理・生産獣医療へと変化しており、繁殖部門では定時受精が普及してきたことから、超音波技術の普及を図るべきと思われる。さらに、超音波技術は豚の早期妊娠診断への利用が可能であり、この面での研究推進が必要である。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの(課題ごとに概要を400字程度)</p>	<p>1. 乳牛の繁殖管理や栄養管理のほか、周産期疾病対策としてボディコンディションスコア(BCS)が牛群管理に広く用いられているが、BCSによる体型測定は目視に頼るために客観性に欠ける問題点がある。体重の定期的測定による体重変動率(WCR)による観察は、BCSより高精度に体型の変化をモニターすることが可能である。小比類巻ら(開業)は、周産期疾病が多発している酪農場(搾乳牛55頭飼養)について、3ヵ月毎にWCR測定による牛群管理の指導を行い、WCRの推移は周産期疾病の発生防止の発生や繁殖成績の向上に有用であることを実証した。</p> <p>2. 牛呼吸器症候群(BRDC)は子牛の集団飼育場で多発し、甚大な経済的損失を与えている。田中(ファイザー)は、本病の発生にはウイルス、マイコプラズマ、細菌などの病原体と、生理的及び環境的ストレスなどが複雑に絡み合っていることを報告した。同様な疾病は豚集団にも多発しており、主要な肥育障害の原因となっていることから、その予防・治療技術の確立が急がれている。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>近年、わが国における牛の繁殖成績は年々悪化する傾向が認められているが、その原因は必ずしも明確になっていない。今回の学会においても繁殖障害の問題が多く取り上げられたが、その原因調査は農場単位にとどまっている。今後、繁殖成績の低下は大きな問題となることが予想されるが、まずは全国レベルでの原因調査が不可欠と思われる。今まで繁殖分野の技術開発の応募課題は多いが、こうした繁殖障害の原因究明の研究課題に対しても積極的に採択できるよう努力する必要があるのではなかろうか。</p>
<p>5. 報告書</p>	<p>柏崎 守</p>